

令和4年度

東京都美術館年報

Tokyo
Metropolitan
Art Museum
Annual Report
2022



TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

3

アート・コミュニケーション事業

人と作品、人と人、人と場所とをつなぎ、アートを媒介とした新たなコミュニケーションを育む活動を展開。美術館に集まる多種多様な人々とのコミュニケーションを大切に、そこから創出される新しい価値観を社会に届けることで、アートを介したコミュニティを育んでいくことを目的としている。

- とびらプロジェクト
- Museum Start あいうえの
- Creative Ageing ずっとび
- 障害のある方のための特別鑑賞会
- とびラーによる建築ツアー
- 学校連携
- 展覧会関連プログラム
- 事業の発信・成果の発表



Illustrated by Mai Kuriyagawa (STUBBIE DESIGN)

とびらプロジェクト

とびらプロジェクトとは、美術館を拠点にアートを紹介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクトである。当館と東京藝術大学(以下、藝大)が連携し2012(平成24)年度より始動。2022(令和4)年度で11年目を迎えた。広く一般から集まったアート・コミュニケータ(愛称:とびラー)は、都美の学芸員、藝大の教員や専門家と対話を重ねながら、美術館の文化資源を活かした活動を展開している。本年度は9・10期とびラーに新たに11期とびラーが加わり、オンラインとリアル両方の場で活動した。

とびラーの活動はボランティアではあるが、美術館のサポーターではない。学びと実践をくり返し、能動的なプレイヤーとしてプロジェクトを推進している。とびラーの任期は3年間であり、その間にアートを介して誰もがフラットに参加できる対話の場をデザインし、さまざまな価値観を持つ多様な人々を結びつける活動を生み出している。

1期から8期までの任期満了したとびラーは合計287人となり、本年度も社会のさまざまな場所でアート・コミュニケータとしての活躍が見られた。

以下、実施プログラムの基本データは事業実績一覧(pp.64-67)を参照。

ウェブサイト <https://tobira-project.info>
(ページビュー/232,050)



11期とびラー募集チラシ

とびラー募集の流れと主な年間スケジュール

2021(令和3)年度

- 12月 11期とびラー募集広報開始
- 1月 11期とびラー応募受付開始
- 1月 「とびらプロジェクト」フォーラム
11期とびラー応募締切
- 3月 1次選考(書類審査)→2次選考(面接)
→11期とびラー決定通知

2022(令和4)年度

- 4月 基礎講座(～6月): 隔週土曜日 全6回
- 7月 実践講座(～2月):
鑑賞実践講座 全7回、アクセス実践講座 全7回、
建築実践講座 全7回
- 7月 「Museum Start あいうえの」当年度プログラム開始
- 8月 「Creative Ageing ずっとび」当年度プログラム開始
- 12月 12期とびラー募集広報開始
- 1月 12期とびラー応募受付開始
- 1月 「とびらプロジェクト」フォーラム
12期とびラー応募締切
- 3月 1次選考(書類審査)→2次選考(面接)
→12期とびラー決定通知
開扉会(かいびかい): 9期とびラーの任期満了式)

年間を通じて、とびラーの自主的な学びあいの場(とびラボ)が656回開催された。

11期とびラーの応募倍率と本年度のとびラー人数

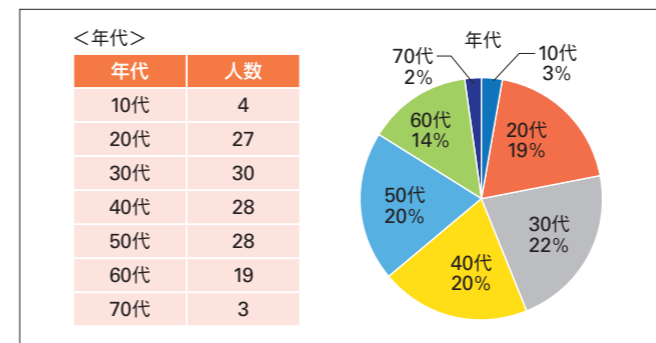
募集に対し420人から応募があり、書類審査、面接を経て、49人を11期とびラーに決定。約10.5倍の倍率であった。この49人と、前年度から更新した9・10期とびラー90人をあわせた計139人で本年度のとびらプロジェクトが始動した。

都美×藝大とびらプロジェクト運営チーム

都美と藝大で組織された運営チームが実務を担当し、当館のプロジェクトルームを拠点に活動した。藝大担当者は小牟田悠介(美術学部特任助教、とびらプロジェクト・マネージャ)、越川さくら(美術学部特任助手、とびらプロジェクト・コーディネータ)、工藤阿貴(美術学部特任助手、とびらプロジェクト・コーディネータ)、代表教員として光井渉(東京藝術大学美術学部長)。都美担当者は熊谷香寿美(東京都美術館学芸員)、峰岸優香(東京都美術館学芸員)。

とびラーの基本属性

9～11期とびラーの基本属性は次の図のとおりである。年齢や仕事、経験、活動できる曜日などが偏らないよう多角的視点から総合的に配慮した上で選考されている。



※2022(令和4)年4月時点

基礎講座・実践講座をはじめとする学びと実践の場

とびラーは、当館のミッションや藝大からのメッセージをもとに、とびらプロジェクトの目指す方向性を共有し、1年目とびラー全員必修の「基礎講座」でとびラーとしての基本的なコミュニケーションのあり方を学ぶ。その後、より実践的な活動場面を想定した選択制の「実践講座」で活動への理解を深める。コロナ禍が続く本年度は、基礎講座は対面にて行い、7月から始まる実践講座ではウェブ会議システム(Zoom)を活用したオンラインとリアル両方で学びを深めることを目指した。



基礎講座(第5回)グッド・ミーティングについて学ぶ

・基礎講座(4～6月の隔週土曜日/全6回/各回約4時間)
アートを介してコミュニティを作るための基礎を学ぶ。対話やクリエイティブなコミュニケーションが起こる場づくりとは?美術館での鑑賞体験とは?といった問いをテーマに、とびラーの活動を支える基礎的な考え方をワークショップ形式で学ぶ。コミュニケーションの最も重要な要素として、高い発信力ではなく相手の話を状況や発言の文

脈に応じてその本意を想像し「きく」受信力を身につけることを目的としている。

聴覚障害を持つアート・コミュニケータへの情報保障として、手話通訳、遠隔文字通訳を導入するとともに、コミュニケーション支援として筆談とUDトークを活用した。

第1回 オリエンテーション(全とびラー対象)

講師/小牟田、熊谷

プロジェクト概要や情報共有ツールについて紹介し、これから活動していく上で必要となるとびラー同士の共通認識をコミュニケーションの中でつくる。

第2回 ミュージアムとウェルビーイング(11期とびラー対象)

講師/小牟田、熊谷

これまでとびらプロジェクトで実践してきたアクセス・プログラム等を題材に、多様なウェルビーイングを人々との関わりで実現する社会包摂の拠点となるミュージアムのあり方について考える。

第3回 「きく力」を身につける(11期とびラー対象)

講師/西村佳哲(プランニング・ディレクター/リビングワールド代表)

コミュニケーションの基本となる、話をしている相手の全体性に関心を向けて「きく」こと、とびらプロジェクトで大切な「きく力」について、講義と体験を通じて学ぶ。

第4回 作品を鑑賞するとは(11期とびラー対象)

講師/熊谷

作品が存在することによって起こる体験にどのような意義があるのか、作品を鑑賞することの意味について理解を深める。

第5回 会議が変われば社会が変わる(11期とびラー対象)

講師/青木将幸(青木将幸ファシリテーター事務所代表)

とびラーの自主的な活動において根幹をなす「ミーティング」の場を、参加する一人ひとりが主体的に関わる場とするための具体的な手法を学ぶ。

第6回 この指とまれ/そこにいる人が全て式/解散設定(全とびラー対象)

講師/西村佳哲

小さなチームのつくり方や、そこに集まった人たち全員の力を活かした活動のつくり方、とびラーが自主的に活動していくための手法を学ぶ。また、活動のはじめ方だけではなく、終わり方のデザインについても理解を深める。

・実践講座(7月以降各講座ごとに適宜実施)

実践的な場面を想定して設けられた3種類の講座。各講座は外部の専門家や学芸員が担当。実践の現場で気付いた疑問なども振り返りながら、アート・コミュニケータとしての学びをより深める。

鑑賞実践講座(作品をよく観察して、その視覚的イメージを言語化し、複数の人でその言葉を聞き合うことで、作品をさらによく観察する。また、視覚的イメージを媒介にして、共同的な思考の場をデザインすることを目的とする。)全7回

講師/三ツ木紀英(特定非営利活動法人芸術資源開発機構 ARDA 代表理事)、熊谷、越川

アクセス実践講座(具体的な社会課題に関わる状況・活動を知ることにより、美術館にアクセスすることが難しい人が、来館し、利用するために必要な支援を考え企画する力をつける。)全7回 ※オンライン2回、リアル5回の実施
講師/川島聡(岡山理科大学教授)、松見幸太郎(NPO法人キッズドア事務局長)、西智弘(川崎市立井田病院かわさき総合ケアセンター腫瘍内科/緩和ケア内科医師、一般社団法人プラスケア代表理事)、小川由美子(公益財団法人ライフ・エクステンション研究所附属永寿総合病院 認知症疾患医療センター看護師)、村田陽次(東京都生活文化スポーツ局 都民生活部 地域活動推進課)、石平晃子(NPO法人 豊島子どもWAKUWAKUネットワーク)、小牟田、越川、藤岡勇人(東京都美術館学芸員)

建築実践講座(東京都美術館の建築の歴史や背景を理解し、自分の感覚を手掛かりに建築を味わう力を身につけ、美術館というパブリックな建築を介して人々をつなぐ場をデザインすることを目的とする。)全7回(オンライン1回、リアル6回の実施)

講師/倉方俊輔(建築史家、大阪公立大学大学院工学研究科教授)、宇田川裕喜(株式会社baum代表)、大西正紀(株式会社グランドレベル ディレクター)、工藤、峰岸、河野佑美(東京都美術館学芸員)

上記講座に加えて、とびラー全員が集合する「とびらステーション」を年に1回開催し、とびらプロジェクトの全体像や今後の方向性を確認しあう機会としている。本年度は、東京都美術館と東京藝術大学を会場に実施、84名が参加し互いに交流する機会とした。

また、「福祉×アート」を考える藝大の履修証明プログラム Diversity on the Arts Project(略称:DOOR)とも連携し、聴講機会も開かれている。特別展・企画展・上野アーティストプロジェクト展・コレクション展については、展覧会担当学芸員による事前勉強会が設けられている。加えて、専門家とともに行う野外彫刻洗浄への参加も昨年に続き呼びかけた。



建築実践講座(第6回)ワークショップ・メイキングの実践
五十嵐晴夫《メビウスの立方体》1978年

オープン・レクチャー

オープン・レクチャーとは、とびラーに加えて一般の方々を対象に毎年行われている公開講座である。ゲスト講師を招き、とびらプロジェクトの活動を進める中で見出された問題意識や目指す社会の姿について知見を深めることを目的とし、アートを介したコミュニティの価値に関して広く一般に発信する機会としている。

2022(令和4)年度は、Zoom ウェビナーを使用して2回を開催した。5月には、「こどもと大人のためのミュージアム思考のスズメ」と題して、『こどもと大人のためのミュージアム思考』(左右社刊、2022年)の出版を記念し、とびらプロジェクトと連動する「Museum Start あいうえの」の理念や実践例を紹介しつつ、社会におけるアート・コミュニケータの役割やミュージアムのあり方について議論した。登壇者は稲庭彩和子(独立行政法人国立美術館主任研究員)、伊藤達矢(東京藝術大学社会連携センター特任教授)、鈴木智香子(独立行政法人国立美術館特任研究員)、藤田千織(独立行政法人国立文化財機構文化財活用センター企画担当課長)、小川達也(国立科学博物館事業推進部 広報・運営戦略課)、熊谷、小牟田。11月には、「アートコミュニティリーグ2022『全国各地のアートコミュニティの現在地—「好き♡幸せ☆尊い!」が生まれる文化縁と

は?』」のタイトルで、全国各地でアート・コミュニケーション事業に取り組む拠点のスタッフが一同に会し、各地の特色ある活動について紹介し、文化資源を介したコミュニティ形成について議論を深めた。登壇者は樋泉綾子(札幌文化芸術交流センター SCARTS)、大澤苑美(八戸市美術館)、高木諒一(たいけん美じゅつ場 VIVA)、大谷郁(東京都庭園美術館)、小野寺伸二(特定非営利活動法人アート・コミュニケーション推進機構(PARC))、濱野かほる(岐阜県美術館)、澤田千家子(宇部市文化創造財団うーばー・プロジェクト)、熊谷、小牟田。準備にあたり全国のアート・コミュニケーションリーグ連携情報支援会を7回行った。



オープン・レクチャー Vol.13 の Web パナー

「とびらプロジェクト」フォーラム

とびらプロジェクトの活動とその意義を広く周知することを目的として、毎年とびらプロジェクトフォーラムを開催している。次年度のとびら募集のための説明会という趣旨も兼ねている。

本年度は、「おせっかいマインドでいこう! 変動する社会におけるコミュニティづくり」をテーマに実施した。コロナ禍を経て、人々のつながりの在り方が見直されるなかで、多様な人々が作品や文化財を介して関わり合うアート・コミュニケータの活動について紹介し、他者と主体的に関わる実践や、これからのコミュニティについて考える機会とした。

第1部は東京都美術館の講堂を会場に行い、YouTubeで後日配信も行った。小牟田がとびらプロジェクトの概要と11年間の歩みを紹介した後、「11年間の挑戦! / 変動する社会におけるコミュニティづくり」と題したトークセッションを行い、西村佳哲と熊谷が聞き手となって、とびラーと任期満了したアート・コミュニケータの6人が自分たちの活動や、その根幹となっている考え方、コミュニティの広がりについて語り合った。

続くディスカッションでは「おせっかいマインドでいこう!」をテーマに、西村、小牟田、熊谷が登壇。美術館を拠点にコミュニティを育ててきたとびらプロジェクトの実践をふりかえり、アート・コミュニケータの働きが人々や社会にもたらしてきた作用について議論を深めた。

第2部は「とびらラボ オープンセッション」をアートスタディールーム、スタジオで開催。とびラーが写真や資料を見せながら普段の活動を紹介し、来場者からの質問にも答えた。また、本年度初めての取り組みとして、講堂では、「とびラーが語る、とびらプロジェクトでの経験」を開催し、西村が聞き手となつたとびラー3名の3年間をふりかえるトークを行った。



とびらプロジェクトフォーラム第2部「とびらラボ オープンセッション」

とびらラボ

「とびらラボ」はとびラー同士が自発的に開催する学び合いの場であり、新しいプロジェクトの検討と発信が行われる場所である。「とびらラボ」は、ある1人のとびラーのアイデアに共感した他のとびラーが集まり3人以上のチームを作るところから始まる。

集まったメンバーのできることを組合せ、興味・関心・得意分野を大切に、お互いに「ききあい」、学芸員や大学教授とも相談しながらアイデアを実現させていく。予めデザインしておいた終わり方に従ってチームが解散した後には、また新しいメンバーが集まり新しい「とびらラボ」が生まれ出される。

とびらプロジェクトでは、このステップを「この指とまれ式」、「そこにいる人がすべて式」、「解散! また結成」と呼んでいる。この活動を経て、オリジナルの活動が生まれ、アートを介したコミュニケーションの可能性が大きく広がっている。同時に「とびらラボ」は様々なバックグラウンドを持つとびラー同士のゆるやかなコミュニケーションの場

でもあり、対話から生まれる充実した時間が美術館に新しい価値を注ぎ込んでいる。本年度も、Zoomでのミーティングとリアルでのミーティングを併用して行った。

年間開催数 656回のべ参加者数 5,540人

「とびラボ」から生まれた活動

◎展覧会に関連した一般来館者対象の活動：

特別展

「ボストン美術館展 芸術×力」

・聴く/見る/話す 鑑賞を深く味わおう

「展覧会 岡本太郎」

・おいでよ・ぶらっと・びじゅつかん

企画展

「フィン・ユールとデンマークの椅子」

・暮らしの彩り おとな美術館

公募展活性化事業

「都美セレクション グループ展 2022」

・ベビーとゆったり美術館

「上野アーティストプロジェクト2022『美をつむぐ源氏物語—めぐり逢ひける えには深しな—』」

・大人のミチクサビジュツカン

・いにしえの世界を味わう アートでつながるミュージアム

・こどもとおとなのはじめのいっほ！

学校教育展

「東京都立総合芸術高等学校 第11回 卒業制作展」

・とびラーと観よう！～総芸卒展2022～

◎当館の建築及び野外彫刻をテーマとする一般来館者対象の活動：

車いすで楽しむ都美散歩、おいでよ・ぶらっと・びじゅつかん、大人のミチクサビジュツカン、トビカン・ヤカン・カイカン・ツアー、トビカン・モーニング・ツアー

◎とびラー対象の活動：

開扉冊子2023、作品鑑賞音声ガイドを作ろうラボ、上野公園探検隊、きこえて何だろう？、あなたの「とびらビフォーアフター」をきかせて描かせてほしいラボ、とびら575句会、消しゴムはんこラボ、えほんラボ、VTS練習会、トビカン・オンライン・フライトツアー、トビカン・スポット・ムービーラボ、とびラー10年すごろく、手話の世界を訪ねよう！、東京の生活史～とびラー版～等 ※詳細はとびらプロジェクトウェブサイトのとびらラボページを参照のこと。 <https://tobira-project.info/tobilab>



「ベビーとゆったり美術館」、「都美セレクション グループ展 2022」、東京都美術館



「聴く/見る/話す 鑑賞を深く味わおう」



「暮らしの彩り おとな美術館」、「フィン・ユールとデンマークの椅子」、東京都美術館

情報共有の仕組

基礎講座や実践講座に関する情報伝達、とびラボやそこから生まれた活動の周知など、100人を超えるとびラーの情報共有を支える仕組みとして、プロジェクトを開始した2012(平成24)年度よりメーリングリストと用途に合わせたウェブ上の6つの掲示板を整備している。ただし、とびらプロジェクトの活動は直接会って話をするを前提としているため、これらの仕組みは補助ツールとして運用している。また、情報共有ツールであると同時に次世代とびラーへのアーカイブとしての機能も果たしている。

コロナ禍が続く本年度は、上記に加えて、オンライン会議システムであるZoomミーティングが情報共有を支える仕組みとして重要な役割を果たした。

これからゼミと開扉会

「これからゼミ」とは、とびらプロジェクトでの任期満了後の活動を考え、その準備を進めるためのゼミである。3年目のとびラーを1名以上含むチームを結成し活動を進める。内容によっては、スタッフとの情報共有の上、館外で活動を行うことも可能である。

本年度のミーティング開催数6回、のべ参加者数66人。

「これからゼミ」から生まれた活動は下記の通りである。

・やさしい8341日本語を使ったVTS

・どうする社会的処方！

・「きく力」

上記のような活動を経て、2023(令和5)年3月には3年の任期を満了したとびラーのための「開扉会(かいびかい)」が開催された。本年度は、三密を避けるため講堂とオンライン配信を組み合わせて実施した。任期満了した9期とびラー42人。



「とびらステーション」での集合写真

アート・コミュニケーターの活躍と広がり

任期満了後のアート・コミュニケーターは、当館内外のさまざまな場で活躍の場を実現している。当館では、任期満了したアート・コミュニケーターが運営する任意団体アート・コミュニケーター東京に「障害のある方のための特別鑑賞会」の運営協力を依頼している。館外では、同じく任意団体アート・コミュニケーター東京が、東京都庭園美術館において障害のある方を対象とした「アート・コミュニケーターとめぐる特別鑑賞ツアー」や「ベビーといっしょにミュージアムツアー」を実施した。7月には任期満了者の団体である特定非営利活動法人アート・コミュニケーション推進機構(PARC)が「アート・コッてなんだ？アートとコミュニケーションと…」と題した3日間の展覧会を主催し、文京シビックセンターにて体験型作品の展示や鑑賞プログラムを行った。

また、当館と同じく前川國男が設計した文化施設において任期満了者の団体が建築ツアーを実施している。神奈川県立音楽堂においては、任期満了者が立ち上げた団体(bridge)が2020年度から継続して定期的な建築ツアーを実施しており、2021年度からは、埼玉会館において任期満了者がボランティア・ガイド「前川國男を知ろう！彩の国探検隊」を務める建築ツアーを定例開催している。

今年度に制作したコンセプトムービーの改訂版では、任期満了後の活動も紹介する内容を組み込み、フォーラムやウェブサイトで公開するなど、発信の機会を広げている。

Museum Start あいうえの

「Museum Start あいうえの」(以下、「あいうえの」)とは、上野公園に集まる9つの文化施設が連携し、子供たちのミュージアム・デビューを応援するラーニング・デザイン・プロジェクトである。小学校1年生～高校3年生及び、その年齢の全ての子供たちを対象とし、複数の文化施設が持つ豊富な文化資源の観察・鑑賞を通した統合的な学びを推進。大人と子供が共に学び合う主体性を重視したアクティブ・ラーニング・プログラムを実施することで、生涯を通じて継続的にミュージアムを活用することができる「ミュージアム・リテラシー」を育むことをねらいとしている。あわせて、参加した子供や保護者、教員、とびラー等で構成される文化財を介した人と人のつながり「ミュージアム・コミュニティ」の形成を目指している。

複数の文化施設の活用を促すツール「ミュージアム・スタート・バック」とウェブサイトを中心に、ミュージアム・大学・市民が協働して子供たちの学びに関わり、プロジェクトを推進させている。本年度の子供の参加者は1,573人。2013(平成25)年の事業開始から累計18,264人の子供がミュージアム・デビューを果たしている。実施プログラムは事業実績一覧(pp.64-67)を参照。
ウェブサイト <https://museum-start.jp>
(ページビュー/203,218)

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館、東京藝術大学
共催：上野の森美術館、恩賜上野動物園、国立科学博物館、国立国会図書館国際子ども図書館、国立西洋美術館、東京国立博物館、東京文化会館(五十音順)

とびらプロジェクトとの連動

「あいうえの」で重要な役割を果たすのが子供たちと一緒に活動する「きく力」のあるとびラー(p.49参照)である。自分に関心を持って耳を傾けてくれる人の存在が子供たちの自己肯定感を育むことにつながる。

とびラーたちはプログラムの中で子供たちの伴走役として活動している。親でも先生でもない多様な大人と出会い、豊富な文化資源を共に鑑賞し、大人と子供がフラットに学びあうことで、子供たちのミュージアム体験がより充実したものになることを目指している。

他方、とびラーにとっては、「あいうえの」でワークショップの場づくりに参画することが、とびらプロジェクトでの各講座の内容を具体的に理解し実践する学びの場となっている。

Museum Start あいうえの運営チーム

都美と藝大で組織された運営チームが実務を担当した。藝大担当者は、小牟田悠介(美術学部特任助教、「あいうえの」プロジェクト・マネージャ)、石丸郁乃(美術学部特任助手、「あいうえの」プログラム・オフィサー)、山崎日希(美術学部特任助手、「あいうえの」プログラム・オフィサー)。当館のプロジェクトルームを拠点に活動した。都美担当者は熊谷香寿美、河野佑美。都美から専門家委託した三浦和紗(2022年4月～11月)。

「ミュージアム・スタート・バック」の特徴

「ミュージアム・スタート・バック」とは、子供たちがミュージアムを楽しく活用するためのスターター・キットである。「あいうえの」のプログラムに初めて参加した子供たち全員にプレゼントしている。

連携各館を紹介するガイドブックである「ビビハドトカダブック」とミュージアムでの体験の記録を書き込める「冒険ノート」の2冊がバインダーにまとめられている。バインダーには「あいうえの」の秘密の呪文(館種を表す言葉の頭文字をつないだ「ビビハドトカダブ」)がホログラムをあしらってデザインされている。

子供たちの意欲をより高めるため、連携各館にバックを持って出かけるとオリジナルバッジを集められる仕組みとなっている。保護者・教員には「あいうえの」を紹介した小冊子「ミュージアム・スタート・バック活用ガイドブック」を配布。



ミュージアム・スタート・バック(ver.9、2022年度版)

ウェブサイトの機能

「あいうえの」ウェブサイトでは、特徴的なコンテンツとして、連携9館の豊富な参加型プログラムや展覧会情報等を一望できる「ミュージアム・カレンダー機能」や、参加者による「冒険ノート」の「投稿フォーム機能」、施設のみどころやそこで働く人々のミュージアム体験に関するインタビュー記事等を掲載した「連携各館紹介ページ」を運用している。また、各プログラムの実施報告として「活動ブログ」を掲載。なお、「冒険ノート」はInstagramの「あいうえの」公式アカウントでも順次公開している。



ウェブサイトトップページ

入口としてのアクティブ・ラーニング・プログラム

「あいうえの」ではあらゆる子供たちが参加できるよう、3つの入口を用意している。広く公平に子供たちに参加してもらうための「学校プログラム」、ファミリーにミュージアムでの学びの機会を提供する「ファミリー & ティーンズ・プログラム」、そして、多様な文化的背景を持つ子供たちや社会的支援を必要とする子供たちを対象とする「ダイバーシティ・プログラム」の3つである。いずれも、大人と子供の学び合いを重視したアクティブ・ラーニングを行っている。

本年度は、オンラインとリアルを組み合わせたブレンディッド・ラーニングや野外彫刻を活用したプログラムなどを実施し、リアルでの実施に重点をおいた。実施したプログラムは以下のとおり。

(1) 学校プログラム

美術館で作品と出会い対話することで、子供たちの見方・感じ方を広げるプログラム。学習指導要領に対応し、

言語活動を通じて子供たちの「主体性」「生きる力」を育む。図工・美術に限らず総合学習や国語など授業のねらいにあわせて実施。都美の学芸員や藝大教員が学校教員の相談に応じ、美術館を活用した授業づくりをコーディネートしている。当日だけでなく事前授業から事後授業まで教員をサポート。事前授業に活用できる作品のアートカード等が入った「鑑賞ボックス」も貸し出している。



スペシャル・マンデー(品川区立城南小学校)
「展覧会 岡本太郎」、東京都美術館



うえのウェルカム(台東区立蔵前小学校)
五十嵐晴夫(メビウスの立方体)1978年

・スペシャル・マンデー

特別展・企画展の休日(月曜日)にゆったりとした展示室で鑑賞授業を行うプログラム。とびラーが子供たちと作品鑑賞を共にし、サポートする。学校から美術館までの往復バスを無料で用意し、美術館を活用しやすい環境を整えている。今年度は、記録動画も制作した。

全11回開催/参加11校、参加者数:577人(児童・生徒数)
対象:都内幼保・小・中・高等・特別支援学校(幼稚園保育園は年長クラスから受入、特別支援学級も受入)

・うへのウェルカム

野外彫刻や開室中の展示室で行う学校対象プログラム。授業のねらいや目的にあわせた幅広い活動を行う。SDGsなどの時事的なキーワードも取り入れて実施。

対象：小、中、高等、特別支援学校・学級(申込状況により、都外の学校も受入)

全5回開催／参加5校、参加者数：279人(児童・生徒数)

(2)ファミリー & ティーンズ・プログラム

ミュージアムの楽しさや上野公園の魅力を体験できる、冒険と発見のプログラム。鑑賞・観察・造形を通して子供と大人がともに学びあうことを目指している。

本年度は下記の3つのプログラムを実施した。

・SDGsで探究！名建築をみる

SDGsをキーワードに、日本のモダニズム建築を牽引した建築家・前川國男の設計による当館の建築を探検し、観察するプログラム。前川の設計思想におけるSDGsに通ずる視点に着目しながら建築を観察。観察にはとびラーが伴走し、子供たちの気づきを促す。帰宅後にはその体験を「冒険ノート」に記録し、ウェブサイトに掲載。オンラインでの発信を通じて子供たちの学びを深める仕組みとした。

実施日：7月29日(金)、8月21日(日)、10月15日(土)、2023年2月4日(土)

全4回実施／参加者数：320人(子供)



SDGsで探究！名建築をみる

・うへの！アトリサーチャー オンライン&リアル
オンラインとリアルで2ステップで、アートを探究し、上野公園の文化施設を楽しむブレンディッド・ラーニング

のプログラム。オンラインで作品をみながらグループで対話するステップ1と、実際(リアル)に文化施設で本物に出会うステップ2を組み合わせた。

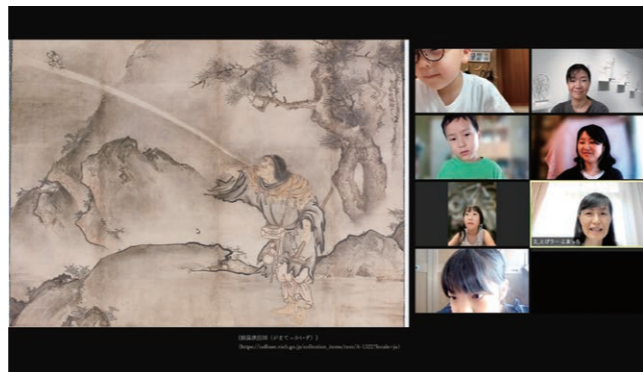
ステップ1では作品画像を複数の参加者でみることで、実際のミュージアムで本物をみてみたいという気持ちを醸成することをねらいとした。オンラインの鑑賞では、とびラーがグループに入り子供たちの発見や気づきをきく役割を果たした。ステップ2では、当館でミュージアム・スタート・バックを受けとり、使い方を学んだ上で、自分の目で観察し思考するきっかけとなるツール(指令書)を受けとり、ミュージアムに出かける。戻ってきたら、指令書をきっかけに考えたことを「冒険ノート」にまとめる活動を行った。とびラーたちは子供たちに寄り添い発見や気づきを言語化するサポートをした。

ステップ1

実施日：6月26日(日)、11月27日(日)、2023年2月19日(日) 全3回実施／参加者数：147人(子供)

ステップ2

実施日：7月18日(月・祝)、12月18日(日)、2023年3月19日(日)全3回実施／参加者数：428人(子供)



ステップ1 オンライン鑑賞の様子
《蝦蟇鉄拐図》東京国立博物館 colbase より



ステップ2 冒険ノート作りの様子

・みる旅ータイムワープいとをかしー1200年の時をかける2日間

ティーンズ(15～18歳)とシニア(65歳以上)を対象とした2日間の異世代交流プログラム。プログラムでは、東京藝術大学大学美術館での特別展「日本美術をひも解くー皇室、美の玉手箱」を題材に、奈良から昭和までの1200年間のさまざまな日本美術の作品を鑑賞。異世代で一緒に作品世界や思考の旅へ出かけ、交流を深めた。旅支度としての1日目は東京都美術館を会場に、展覧会の作品を図版を使って鑑賞するなどして参加者がお互いを知り合う時間を過ごした。2日目は展示室で作品を前にグループや個人での鑑賞を行った。(プログラムの概要はp.59にも記載)

実施日：8月14日(日)、15日(月)

参加者数：55人(ティーンズ・シニア合計)



東京藝術大学大学美術館での作品鑑賞の様子
「日本美術をひも解くー皇室、美の玉手箱」展、東京藝術大学大学美術館



参加者集合写真

(3)ダイバーシティ・プログラム

多様な文化的背景を持つ人々が、文化や言語を越えて違いや共通点を知り、相互理解を深めるプログラム。様々な社会的状況にある子供たちを対象に、2016年度から実施している。児童養護施設、経済的困難を抱えた子供をサポートするNPO、外国にルーツを持つ子供をサポートするNPOなど、関連する団体と連携し、文化や言語の違いを超えて、子供や大人が出会い、対話することを目指している。

・美術館でやさしい日本語プログラム「わたしの線を見つけよう」

インド、ベトナム、アメリカ、日本などにルーツを持つ子供とその保護者を対象に、やさしい日本語を使ったプログラムを開催。東京都美術館での特別展「展覧会 岡本太郎」において岡本太郎の作品にある線の特徴を観察した。子供たちは線の動きのイメージを掴んだあとで、絵の具や様々な筆を使って大きな画用紙に思い思いの線を描く造形活動を行い、1人ずつ完成した作品を前に「わたしの線」について発表し合った。

実施日：12月3日(土)

1回開催／参加者数：子供12人、保護者9人、とびラー19人



造形活動の様子

・ミュージアム・トリップ

認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークと認定NPO法人キッズドアと連携し、それぞれが支援している子供たちを対象に、夏休みに美術館を楽しめるプログラムを開催。東京都美術館での企画展「フィン・ユールとデンマークの椅子」の鑑賞&レストランでの昼食、東京藝術大学の工房訪問などキャンパスツアーを行った。

Creative Ageing ずっとび

実施日：8月4日(木)、23日(火)

2回開催／参加者数：子供25人、引率者6人、とびラー 20人



作品鑑賞の様子(認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク)「フィン・ユールとデンマークの椅子」、東京都美術館

あいうえのコミュニティ

「あいうえの」では、「あいうえの」参加者のミュージアムを活用した継続的な学びを支援し、「ミュージアム・リテラシー」を育む、ミュージアムを拠点にしたつながり「あいうえのコミュニティ」を支える仕組みを用意している。参加者全員が「あいうえのメンバーシップ」に登録することができ、メンバーには専用ニュースレター(あいうえの通信)を発行。ミュージアムや文化財を介したコミュニティの形成へのステップを継続的に創出している。本年度は、ニュースレターを5回発行した。

また、「あいうえのコミュニティ」においては、とびラーは重要なパートナーであり、とびラーの実践的な学びの場を創出することで、とびラーにコミュニティの一員として主体的に関わってもらうことを目指している。この目的を実現するため、全てのプログラムの前後には、事前の準備会と事後の振り返りを実施している。

本年度は事前の準備会を24回実施、また、全てのプログラムの後には振り返りを実施した。

実施回数：24回

参加者：とびラー 486人

・アンバサダー・プログラム

「アンバサダー・プログラム」とは、「あいうえのコミュニティ」を広げる取り組みの1つであり、とびラー自らが自身の属するコミュニティから参加者を募って、「あいうえの」を紹介するものである。

自身が属するコミュニティの子供やその保護者を対象

に、「あいうえの」の趣旨やコンセプトを自らの言葉で紹介した上で、上野地域のミュージアムを体験するプログラムを企画・立案することで、とびラーの「あいうえの」に対するより深い理解を醸成することを目指している。

実施回数：4回

参加者：子供9人、保護者・引率者3人、とびラー4人

「Creative Ageing ずっとび」は超高齢社会に対応して、2021年度よりシニア世代を対象に始めた新しい事業である。「Creative Ageing(クリエイティブ・エイジング)」は海外のシニア向けの文化事業でよく用いられるスローガンで、「創造的に年を重ねる」という意味が込められている。また、歳を重ねても「ずっと」通いたくなる美術館を目指し、当館の愛称である「とび」と重ねて「ずっとび」という言葉が生まれた。この二つの言葉を組み合わせた「Creative Ageing ずっとび」(以下ずっとび)は、人や作品との出会いを通して、シニアがより主体的で創造的に楽しめる参加型のプログラムを実施している。

アート・コミュニケーション事業が取り組む、美術館の文化資源を介した多様な人々の社会参画とコミュニケーションの場づくりは、人々の健康やウェルビーイングにも寄与する役割も担ってきた。ずっとびでは、この役割をシニアに向けてより意識的に展開していくことで、当館が高齢者の健康を作る場となり、さらには高齢化に伴う社会的孤立や孤独などのさまざまな社会問題にも向き合うことを念頭に入れて活動を行っている。医療や福祉分野とも連携を図り、薬の「処方箋」ではなく社会的な繋がりを生む「社会的処方」を、当館の特性を生かす形で実装していくことを長期的な目標に掲げている。都美の担当者は熊谷香寿美、藤岡勇人、都美から専門家委託した手代木理沙(2022年4月～6月、7月～2023年3月まで藝大「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点推進機構 特任助手)ウェブサイト <https://www.zuttobi.com/>(ページビュー／20,727)

事業の2年目となる2022年度は、昨年度に引き続きアクティブシニアを対象にした異世代交流プログラムを実施したり、認知症の方とその家族を対象にした美術館活動を推進していくための研究会及び台東区の医療福祉機関と連携した鑑賞プログラムを実施したりした。

国際カンファレンス分科会

ミュージアムが健康を作る場に一超高齢社会の中での「社会的処方」

2022年6月28日～7月7日に芸術文化による共生社会の実現を目指す国際カンファレンス「だれもが文化でつながる国際会議」が開催され、文化事業における社会的包摂やウェルビーイングをテーマに、国内外の取り組みや動向を紹介し合った。この会議の分科会セッション1「ミュージアムが健康を作る場に一超高齢社会の中での「社会的処方」で

は、台湾の博物館関係者を交えて、東京都美術館の歴史やずっとびの事業紹介、「社会的処方」の取組みが進む台湾のミュージアムの社会的背景、そして国立台湾歴史博物館の活動事例が発表され、超高齢社会におけるミュージアムの新しい可能性や役割について検討した。また、公募棟展示室で開催された同カンファレンス「ショーケース」では、本発表の背景にあるアート・コミュニケーション事業の取組みについて、写真や映像などのアーカイブを用いて展示した。

実施日：7月3日(日)

登壇者：邱君妮(東京文化財研究所文化遺産国際協力センターアソシエイトフェロー)、林潔琪(国立台湾歴史博物館公共サービス・教育担当キュレーター)、稲庭彩和子(独立行政法人国立美術館本部主任研究員)、藤岡

参加者数：48名



「だれもが文化でつながる国際会議」分科会セッション1 発表の様子

異世代交流プログラム「みる旅」

「Museum Start あいうえの」との共同企画により、東京都美術館と東京藝術大学を会場に、異世代交流プログラム「みる旅：タイムワープいとをかしー 1200年の時をかける2日間」を実施した。65歳以上のシニアが15～18歳のティーンズと一緒に活動し、日本美術の作品を介して対話を深めながら交流した。(プログラムの概要はp.57にも記載)

実施日：8月14日(日)、15日(月)

参加者数(2日間のべ)：29人(ティーンズ)、26人(シニア)

認知症の方とご家族を対象にしたプログラム

高齢化に伴い誰もが当事者になり得ると言われる認知症の方とその家族を対象に、美術館での作品鑑賞と対話が楽しめるプログラムを開催した。実施にあたり、昨年度から

研究会や協議を重ねてきた台東区の医療機関及び地域包括支援センターと連携した。

(1) オレンジカフェ「とびラーと楽しむ美術館めぐりーデンマーク家具の世界ー」

当館が立地している台東区の永寿総合病院と、たいとう・まつがや地域包括支援センターが開催している「オレンジカフェ(認知症カフェ)」を、当館を会場に実施。認知症の方とその家族と、とびラーがそれぞれ1対1のペアになり、企画展「フィン・ユールとデンマークの椅子」をめぐった。家具や椅子などのデザインを鑑賞し、参加者がそれぞれに感じたことや思い出を共有した。

実施日：9月6日(火)

参加者数：17名



オレンジカフェのウェブ用バナー



オレンジカフェの様子
「フィン・ユールとデンマークの椅子」、東京都美術館

(2) 美術館で絵を楽しもう！「ずっとび鑑賞会ー展覧会 岡本太郎」

台東区で開催している認知症カフェの一つ「喫茶Y・O・U」を当館で実施。認知症の方とその家族が、とびラーも含めて5～6人のグループになり、「展覧会 岡本太郎」の展示室を散歩した後、グループで一つの作品を囲んで座り、じっくり鑑賞。作品から感じたことや思い出したことを、相互に話し合った。

実施日：11月28日(月)

参加者数：15人



ずっとび鑑賞会の様子
「展覧会 岡本太郎」、東京都美術館

撮影：中島佑輔

外部の専門家との意見交換会及び調査研究

東京藝術大学を中心とする産学官民の共創プロジェクト「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点*」に参画し、参画団体と連携したプログラムの実施や情報共有及び共同研究の機会をつくっている。11月には英国の室内管弦楽団マンチェスター・カメラータの来日にあわせ、国立美術館と東京藝術大学のメンバーと一緒に、認知症の人々に向けたそれぞれの取組みや今後の展望について話し合った。

*国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が公募する「共創の場形成支援プログラム」育成型(共創分野)プロジェクトとして2021年度に採択された。

実施日：11月16日(水)

参加者数：13人



マンチェスター・カメラータとの意見交換会

障害のある方のための特別鑑賞会

障害のある方がより安心してゆっくり鑑賞できるように、特別展の休室日に事前申込制で「障害のある方のための特別鑑賞会」を開催している。

本年度は「スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち」「ボストン美術館展 芸術×力」「展覧会 岡本太郎」「レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才」にて各1回ずつ実施、合計2,297人の参加者があった。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示室での混雑を避ける目的で、受付を前年度と同じように1時間ごとの時間指定制で行った。とびらプロジェクトと連動し当日の運営には総計119人のとびラーが参加した。任期満了したアート・コミュニケータから構成される任意団体「アート・コミュニケータ東京」にも運営協力を依頼し、事前準備を経て総計219人の「アート・コミュニケータ東京」会員が参加した。

本年度も参加者のサポートを行うアート・コミュニケータについて紹介するスライドを会場入り口に設置し、アート・コミュニケーション事業の理解を促す一助とした。

[運営協力：任意団体アート・コミュニケータ東京]

実施日：5月30日(月)10:00～16:00

「スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち」

実施日：8月8日(月)10:00～16:00

「ボストン美術館展 芸術×力」

実施日：11月28日(月)10:00～16:00

「展覧会 岡本太郎」

実施日：2023年3月13日(月)10:00～16:00

「レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才」



障害のある方のための特別鑑賞会「スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち」、東京都美術館

とびラーによる建築ツアー

「とびラーによる建築ツアー」は、建築家・前川國男の設計による当館の建物の魅力を味わうプログラムである。建築家が込めた想い、歴史、建物の色・デザインといった建築を楽しむポイントを切り口に、当館の建築空間をとびラーと対話しながら散策する。ガイドを務めるとびラーそれぞれのオリジナリティが発揮された独自のプログラムを展開している。奇数月の第3土曜日14時から開催。

本年度は1回の参加定員を30人とし、参加方法は事前予約制とした。また、実施当日はソーシャルディスタンスを保つため、3～4人の少人数のグループにガイドとサポートを務めるとびラーが2人付き、ワイヤレス無線機を使いながらツアーを実施した。

実施日：5月21日(土)、7月23日(土)、9月17日(土)、11月19日(土)、2023年1月21日(土)、2023年3月18日(土)

全6回開催、参加者計158人

上記の定例のツアーに加え、ライトアップされた当館を散策する「トビカン・ヤカン・カイカン・ツアー」を全9回と、平日の朝に楽しめる30分間のコンパクト版建築ツアー「トビカン・モーニング・ツアー」を全5回行った。



とびラーによる建築ツアーの様子

学校連携

公立美術館の大きな役割のひとつに学校連携がある。学習指導要領にも学校と美術館との連携が明記されており、今後もさらなる連携が求められている。当館では、2013(平成25)年度から「Museum Start あいうえの」(詳細はpp.54-58)が始まり、小・中・高校生対象のプログラムに特化した形で拡充されている。ここでは、年間を通じた学校対応や教員のための研修会の開催や受け入れ、都内教育機関を対象とした観覧料免除申請、インターンシップの受け入れ等について触れる。

2022(令和4)年度に実施したプログラムは以下の通りである。(事業実績一覧はpp.64-67参照)

年間を通じた学校対応と観覧料免除申請

年間を通じ、教員からの来館相談に応じている。また、学校教育活動として特別展・企画展・上野アーティストプロジェクトを観覧する場合には、オンラインの来館事前連絡フォームより受け付けており、都内教育機関の引率教員が観覧する場合は、オンラインの観覧料免除申請フォームを利用することで観覧料が免除される。コロナ禍においても、様々な環境にある児童・生徒の美術館での学びの機会の担保に寄与することを目指し、「スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち」、「ボストン美術館 芸術×力」、上野アーティストプロジェクト2022「美をつむぐ源氏物語—めぐり逢ひける えには深しな—」及び「展覧会 岡本太郎」「レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才」「フィン・ユールとデンマークの椅子」にて実施した。

参加者数は児童・生徒2,627人、引率教員191人。

教員向け研修

学校の教員(教科不問)を対象に、美術館をよく知り、有効に活用してもらうための研修プログラムとして「ティーチャーズ・デイ」を開催している。アート・コミュニケーション事業の基本的な考え方や「Museum Start あいうえの」の取組み、そして具体的な学校連携プログラムの事例紹介等を行っている。

本年度は1回実施した。6月11日(土)10:00～11:00 参加者10人

また、研修協力として、千葉県我孫子市立教育研究会図工美術部門、新宿区立小学校教育研究会図画工作科研修会、台東区図工研究部会の研修の受け入れ、東京都公立学校中堅教諭等資質向上研修Iの受け入れを行った。



ティーチャーズ・デイ

専門的人材の育成

美術館を支える専門的な人材育成を行っている。将来の文化芸術活動を支える人材の育成に寄与するため、主に文化施設の事業や運営に関連する分野を専攻する大学院修士課程に在籍する学生を対象に、最長で1年間、若干名をインターン生として受け入れ、現場を通して学ぶ機会を提供している。本年度は1人を受け入れ、実践的な学びを深めてもらった。

また、依頼のあった大学の学芸員課程の授業等に加えて、高校生ボランティア、職業インタビューの受け入れ、博士論文の取材対応等を行い、アート・コミュニケーション事業の理念や活動を伝える機会とした。対応校13校、参加生徒・学生106人。



インターンシップ

撮影：中島佑輔

展覧会関連プログラム／事業の発信・成果の発表

展覧会関連プログラム

当館で開催される特別展、企画展、公募展活性化事業、コレクション展をより深く理解し、より豊かに楽しんでもらえるよう、開催期間中にさまざまなプログラムを行っている。2022(令和4)年度に実施したプログラムは以下の通り。(事業実績一覧はpp.64-67参照)

1 上野アーティストプロジェクト ジュニアガイド

2022年度は主に中高生を対象にジュニアガイド「上野アーティストプロジェクト2022『美をつむぐ源氏物語—めぐり逢ひける えには深しな—』」を12,000部作成した。展覧会のテーマをはじめ、7人の作家が源氏物語の場面や和歌などをそれぞれにアレンジして表現した作品世界について、わかりやすく伝わる内容にまとめた。



制作：藤岡勇人(編集・テキスト)、杉山哲司、イラスト：Tsukasa Doi、デザイン：栗谷川舞

2 とびラボ発展展覧会関連プログラム

とびラーの発案により、さまざまなプログラムが開催された。詳細はp.52を参照のこと。

3 企画展及び上野アーティストプロジェクト関連プログラム

2023年度に開催予定の「うえののそこから「はじまり、はじまり」荒木珠奈 展」の関連企画として、外国と日本にルーツがある子供たちを対象に、やさしい日本語を使った多文化共生プログラム「昔ばなしがきこえるよ」を実施。また、「上野アーティストプロジェクト2022『美をつむぐ源氏物語—めぐり逢ひける えには深しな—』」では、関連プログラムとして、からだ全体で作品をあじわうダンス・プログラム「ダンス・ウェル」や担当学芸員による講演会及び出品作家によるアーティストトークを実施した(詳細はp.31)。



「昔ばなしがきこえるよ」の様子

撮影：石井俊

4 財団内連携事業関連プログラム

2022年6月28日～7月7日に開催された国際カンファレンス「だれもが文化でつながる国際会議」が、東京国立博物館と東京都美術館を主な会場に行われた。本会議のテーマと並行し開催された分科会は、アートスタディールームを会場に、国内の文化施設や中間組織等の実践者やアーティストによる活動報告を中心に、今後の展望をディスカッションし、各セッションテーマにおける芸術文化領域でのアクションと未来に向けた展望を共有した。また、公募棟ロビー階第1展示室では展示会が行われ、アジア域内の3つの文化施設・組織の活動を紹介した「アーカイブ展示」の中で、アート・コミュニケーション事業における社会課題に対応した取組みの紹介展示を行った。



「アート・コミュニケーション事業におけるソーシャルデザインの活動」、東京都美術館展示ブース

5 事業の発信・成果の発表

2021年度から始まった「Creative Ageing ずっとび」の2年間の取組みをまとめた冊子『Creative Ageing ずっとび 2021.4→2023.3 報告書報告書』を発行。プログラムの活動写真や参加者の声、また活動を共にしたとびラーや医療・福祉関係者からのコメント等を掲載した。



【Creative Ageing ずっとび 2021.4→2023.3 報告書報告書】

Creative Ageing ずっとび プログラム参加のべ人数 300人

プログラム名	開催日	回数	参加者数			参加者計
			とびラー	一般参加者等		
異世代交流プログラム	みる旅：タイムワープいとをかし—1200年の時をかける2日間	8月14日(日)、15日(月)	2回	32	55	87
認知症の方とその家族を対象にしたプログラム	オレンジカフェ「とびラーと楽しむ美術館めぐり—デンマーク家具の世界—」	9月6日(火)	1回	17	17	34
	ずっとび鑑賞会「展覧会 岡本太郎」	11月28日(月)	1回	14	15	29
	分科会 ミュージアムが健康を作る場に—超高齢社会の中での「社会的処方」	7月3日(日)	1回	0	48	48
	クリエイティブ・エイジング意見交換会	11月16日(水)	1回	0	9	9
	地域連携 研究会	5月10日(火)、5月26日(木)	2回	0	9	9
とびラーとの学び合いの場	各プログラムのとびラー対象準備日および振り返り	7月31日(日)、8月8日(月)、9日(火)、27日(土)、30日(火)、9月5日(月)、11月20日(日)	7回	48	0	48
視察				0	36	36
合計				111	189	300

障害のある方のための特別鑑賞会 プログラム参加のべ人数 2,416人

プログラム名	開催日	回数	参加者数			参加者計
			とびラー	一般参加者等		
障害のある方のための特別鑑賞会	スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち	5月30日(月)	1回	31	585	616
	ボストン美術館展 芸術×力	8月8日(月)	1回	29	617	646
	展覧会 岡本太郎	11月28日(月)	1回	21	489	510
	レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才	2023年3月13日(月)	1回	38	606	644
合計				119	2,297	2,416

とびラーによる建築ツアー プログラム参加のべ人数 610人

プログラム名	開催日	回数	参加者数			参加者計	
			とびラー	開扉とびラー	一般参加者等		
建築ツアー	5月21日、7月23日、9月17日、11月19日、2023年1月21日、2023年3月18日	いずれも土曜日	6回	96	0	158	254
トピカン・ヤカン・カイカン・ツアー	5月27日、6月10日、24日、8月5日、19日、9月2日、11月11日、25日、12月2日	いずれも金曜日	9回	126	0	124	250
トピカン・モーニング・ツアー	4月19日、7月5日、8月23日、10月11日、12月6日	いずれも火曜日	5回	62	0	44	106
合計				284	0	326	610

学校連携 プログラム参加のべ人数 3,007人

プログラム名	開催日	回数	参加者数			参加者計	
			とびラー	児童・生徒	教員等		
視覧料免除申請(都内教育機関)	スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち	4月22日(金)～7月3日(日)	9回	224	18	242	
	フィン・ユールとデンマークの椅子	7月23日(土)～10月9日(日)	2回	13	4	17	
	ボストン美術館展 芸術×力	7月23日(土)～10月2日(日)	17回	203	27	230	
	展覧会 岡本太郎	10月22日(土)～12月28日(水)	23回	641	48	689	
	上野アーティストプロジェクト2022「美をつむぐ源氏物語—めぐり逢ひける えには深しな—」	11月19日(土)～2023年1月6日(金)	6回	54	8	62	
	レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才	2023年1月26日(木)～4月9日(日)	31回	577	36	613	
	学校来館(都外教育機関)	スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち	4月22日(金)～7月3日(日)	10回	254	18	272
学校来館(都外教育機関)	フィン・ユールとデンマークの椅子	7月23日(土)～10月9日(日)	1回	24	1	25	
	ボストン美術館展 芸術×力	7月23日(土)～10月2日(日)	5回	52	1	53	
	展覧会 岡本太郎	10月22日(土)～12月28日(水)	19回	316	18	334	
	上野アーティストプロジェクト2022「美をつむぐ源氏物語—めぐり逢ひける えには深しな—」	11月29日(火)	1回	18	4	22	
	レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才	2023年1月27日(火)～3月25日(土)	14回	251	11	262	
	教員研修	中堅教諭等資質向上研修I受入(羽村市立松林小学校)/1名受入	7月9日(土)、7月31日(日)、8月14日(日)、8月15日(月)	4回	0	4	4
	中堅教諭等資質向上研修I受入(台東区立谷中小学校)/2名受入	7月9日(土)、7月23日(土)、7月29日(金)、7月31日(日)、8月10日(水)、8月14日(日)、8月15日(月)、8月17日(水)、8月24日(水)	9回	0	9	9	
教員研修	千葉県我孫子市立教育研究会園工美術部門	8月23日(水)	1回	0	13	13	
	新宿区立小学校教育研究会 図画工作科研修会	9月21日(水)	1回	0	27	27	
	台東区園工研究部会	12月20日(火)	1回	0	13	13	
	ティーチャーズ・デイ	6月11日(土)	1回	0	10	10	
	教員研修の打合せ	新宿区立小学校教育研究会 図画工作科研修会	7月26日(火)	1回	0	2	2
教員研修の打合せ	台東区園工研究部会	12月1日(木)	1回	0	2	2	
	専門的人材の育成およびネットワーク	東京都立大学	10月29日(土)	2回	30	6	36
	ロンドン大学	6月14日(火)	1回	0	1	1	
	目白大学	2023年1月7日(土)	1回	12	1	13	
	お茶の水女子大学	2023年1月31日(火)、3月9日(木)	2回	20	3	23	
学校来館対応(奉仕活動受入)	都立西高等学校	7月9日(土)、31日(日)、8月14日(日)、15日(月)	4回	4	0	4	
職業インタビュー	練馬区立石神井中学校	11月18日(金)	1回	10	0	10	
	川崎市立有馬中学校	11月22日(火)	1回	3	1	4	
	学校対応「探究学習」での生徒来館	北豊島高等学校1年生	4月23日(土)、28日(土)	2回	5	1	6
校外学習下見(展覧会 岡本太郎)	トキワ松学園 高等学校	11月3日(木)	1回	1	0	1	
	中野区立教育センター教育支援室	12月16日(金)	1回	2	0	2	
	白岡市立善哉中学校	12月17日(土)	1回	3	0	3	
	江東区第二砂町中学校	12月27日(火)	1回	1	0	1	
来館下見教員対応	千葉県野田市立第一中学校	5月12日(木)	1回	0	2	2	
合計				2,718	289	3,007	

展覧会関連プログラム／事業の発信・成果の発表 プログラム参加のべ人数 567人

プログラム名	開催期間・開催日	回数	参加者数			参加者計
			とびラー	開扉とびラー	一般参加者等	
上野アーティストプロジェクト2022「美をつむぐ源氏物語—めぐり逢ひける えには深しな—」	ダンス・ウェル	11月27日(日)	1回	0	0	26
	講演会	11月20日(日)	1回	0	0	43
	アーティスト・トーク	11月26日(土)、12月3日(土)	2回	0	0	294
多文化共生プログラム「昔ばなしがきこえるよ」		8月17日(水)、8月24日(水)	2回	27	0	58
だれもが文化でつながるプロジェクト国際会議 分科会		7月3日(土)、4日(日)	5回	0	0	119
合計				27	0	540

令和4年度 東京都美術館年報

Tokyo Metropolitan Art Museum
Annual Report 2022

発行日／令和5年10月

執筆・編集／東京都美術館

印刷／株式会社ルナテック

発行／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館
〒110-0007

東京都台東区上野公園8-36

TEL 03-3823-6921 (代表)

FAX 03-3823-6920

© Tokyo Metropolitan Art Museum

The first part of the document discusses the importance of maintaining accurate records of all transactions. It emphasizes that every entry, no matter how small, should be recorded to ensure the integrity of the financial statements. This includes not only sales and purchases but also expenses and income. The document also highlights the need for regular reconciliation of bank statements and the company's records to identify any discrepancies early on.

In addition, the document provides a detailed breakdown of the accounting cycle, which consists of eight steps: identifying the accounting cycle, journalizing, posting, determining debits and credits, preparing a trial balance, adjusting entries, preparing financial statements, and closing the books. Each step is explained in detail, with examples provided to illustrate the process. The document also includes a section on the importance of internal controls, which are designed to prevent and detect errors and fraud.

The second part of the document focuses on the preparation of financial statements. It explains how to calculate net income, which is the difference between total revenue and total expenses. The document also discusses the importance of the balance sheet, which shows the company's assets, liabilities, and equity at a specific point in time. The income statement, which shows the company's performance over a period of time, is also discussed in detail.

Finally, the document concludes with a section on the importance of accurate financial reporting. It emphasizes that the financial statements should be prepared in accordance with generally accepted accounting principles (GAAP) and should be reviewed by an independent auditor. The document also includes a section on the importance of transparency and accountability in financial reporting.